不蔭大西敬太郎著

亂世の英雄

第壹編

一名 在野諸名士公評録

宮内庁書陵部

特20
848
No 17475/22

自序

新日本の基礎たる帝國憲法は既に前月を以て發布せられ故治上の一大段落たる國會開設の期は早や來年に迫れり時の進むに從ひ我政治界の錯雜多忙を來すは自然の勢にて正に是れ立憲自由の新春を迎ふるの臘月——乃ち俗に所謂犬の手も人の手と云ふ極頻繁の時機なり左れば今日に於て全國の政黨政社又は志士論客の情態を明らむるは其準備の端にして強ち無用の業にあらざるべき歟。本書世の大方諸賢に向て國會議員候補者撰定の材料たらんことを期するに非れども腦裡未だ桃源の痴夢を脱せず今尚ほ金紋先箱ェーホーー下に居ろーの舊天地と一般政治上の事は總て他に一任して身は庚申塚上の三猿

たる農商工業其人に向ては聊か其邊の參考とならんことを期するものなり。」

故に本書は此の一編に止まらず又た强ち政治家中僅々なる親分株花方連にのみ限らず考証探訪の及ばん限りは苟くも他日國會の新舞臺に上らんかと思はる、學者論客は勿論自ら氣取る似非政治家迄も遺さず洩さず悉く之を網羅し可成丁寧に精確に之を批評し且加るに政黨政社の情態を以て一二編三編より以下十編廿編にも至り以て彼の空々漠々として政治の政――の字も味はざる御多分附主義の徒と雖も幾分か撰擧上に注意し彼の黨は斯々の主義なり故に取るべし彼の人は云々の派なり故に取るべからずと云ふが如き斷定をなすの標準となさんとす是れ本書の期望なり

本書の期望は斯の如し左れど奈何せん著者の淺識なる仮令自ら精確を期するも往々事實を誤るとあるは決して免れ難き所にして著者の近眼を以て錯乱麻も啻ならざる政界特に變轉常なき個々人々の心事迄を――指点するは恰も眺望閣上淡島々邊を望み彼は和船なり此は洋船なり彼は何物を搭載せり此は何品を搭載せり抔評すると一般船舶の區別は略ぼ其當を得んも搭載する物品如何に至りては只想像に止まるを以て或は幸にして其の當を得るともあらんが或不幸にして其實を失するともあらん其は著者の豫じめ閉口頓首再拜して江湖諸君の大容を希ふ處なり。」

特に昨今は如何に批評の時代なりとはいへ棺を蓋ふて後

論初て定まるとか云ふなるに漫に當世の諸名家其人に向て彼是批評を試むるは實に失敬の所爲たるを逭れず矧んや許紹其人の明なき後進の身を以て孟德に勝る万々の先覺諸士を評するをや、是亦た僭越の罪謝するに辭なしと雖も其之を評するに當て有心故意或は事實を揑造して人を讒誣毀傷し或は文章を婉曲にして人を回護辯庇するが如きは決して著者の屑しとせざる處なり、實に屑しとせざる而已ならず著者の拙筆なる訥辨なる到底爲し能はざる處なれば記事自から無私公平に庶幾からん歟、只夫れ語辭の不躾にして特に或は敬を欠くが如きは修飾を嫌ふ著者頑癖の致す處と文彩に乏しき著者拙筆の罪なれば如何とも爲し難し、編中諸君の胸量ある希くは疎狂なる吾人の妄言

を大容して幸に名譽毀損の訴を起す勿れ

明治二十二年三月十五日

著者

著者追白

本書題して亂世の英雄といふは聊か穩當ならざる如しと雖も著者の意は彼の許紹の語に因みしまでにて強ち編中の諸士を曹操其人に比するにあらず看者幸に唯月旦評と解せば可なり

尙著者の筆に花なく文章字句の拙陋なるは固より其所なりと雖も、特に本編は匆卒稿を起し匆卒に之を了したるを以て――手間ヒマ厭はず念に念いれ骨折てさへ見苦しき文章の猶更に其――字句の不揃な

なる語辭の粗畧なる我ながら卷に對して轉た悵怛たらずんばあらざるなり、左れど本書は此の一編に限らされば爾后第二編以下各編の如きは可成勉强すべし看者幸に諒焉

●亂世の英雄一名在野諸名士公評錄

第一編　目錄

●板垣退助伯　●沼間守一君　●河野廣中君
●後藤象次郎伯　●末廣重恭君　●尾崎行雄君
●谷干城子　●福地源一郎君　●杉田定一君
●中島信行君　●中江篤介君　●鹿島秀麿君
●片岡健吉君　●矢野文雄君　●栗原亮一君
●福澤諭吉君　●大井憲太郎君　●荒川高俊君
●星亨君　●柴四朗君

附錄

●大隈重信伯　●井上馨伯

第二編　目錄　近刊

○島本仲道君○新井章吾君○八木原繁祉君
○內藤魯一君○大岡育造君○高梨哲四郎君
○大石正巳君○松尾清次郎君○渡邊小太郎君
○島田三郎君○犬養毅君○角田眞平君
○植木枝盛君○井上角五郎君○中島又五郎君
○德富猪一郎君○藤田一郎君○加藤政之助君
○小林樟雄君○板倉中君○前島豐太郎君
○田口卯吉君○關直彥君○吉田熹六君
○志賀重昂君○稻垣示君○菊池侃二君
○肥塚龍君○織田純一郎君○砂川雄峻君

附錄

○全國諸政黨概評　○新聞雜誌概評

○新島襄君○高橋基一君○樽井藤吉君
○河野主一郎君○芳野世經君○大谷木備一郎君
○大江卓君○北田正董君○平島松尾君
○牟田口元學君○中上川彥次郎君○高田早苗君
○林有造君○阪崎斌君○卿苅親朋君
○增島六一郎君○兒玉仲兒君○岡本武雄君
○竹內綱君○吉田正春君○善積順藏君
○藤田茂吉君○大三輪長兵衛君○小島忠里君
○林包明君○新井毫君○東尾平太郎君
○中野武營君○丸山名政君○竹內正志君
○元田肇君○村松愛藏君○宮崎富要君

○箕浦勝人君○薩陀正邦君○城山靜一君
○曽丁法君○花香恭次郎君○加藤平四郎君
○小幡篤次郎君○岡山兼吉君○江口三省君

尚以下漸次發刊

●發行者附言此ノ第一編ハ實ニ本年三月中浣ヲ以テナレリ、然ルニ故アリテ出版聊カ延引セリ、故ニ例セハ民間黨ノ領主トシテ記サレタル某伯ニシテ今日ハ既ニ官海ノ人トナルガ如キ無キニアラズ、或ハ之ガ改竄ヲ請ハント思ヒシガ全体ノ結構ヲ損スルノ恐アリ且彼ノ件ノ如キ只ダ朝野其居所ヲ換ヘシ迄ニテ其大体ノ主義ニ至テハ別ニ變更スル處無キニヨリ舊稿ノ儘毫モ修正スル所ナシ亦タ修正セザルモ強チ不都合ナカラント信ズ看者幸ニ之レヲ諒セヨ

亂世の英雄第一編

大西松蔭編述

内務省

版權所有

我皇上聖旨仁恩の厚き爰に本年紀元の佳節を以て建國以來未だ嘗て有らざる帝國憲法を發布あらせ給ひ世は將に立憲政治の春たらんとす我輩帝國の臣民たる者誰か聖恩の廣きに感泣せざる者あらん、嗚呼天理民彝の大なる上下和合して一体なるを此の如きの盛なるは蓋し古今東西空前絶后とや謂はん、然と雖も宇宙間森羅萬象其何たるに論なく凡て事物の發生するや必らず之が起因あらざるなきは彼の東風三月櫻花の爛熳たるは曾て小春陽氣の既に之が起因を爲すに由ると一般なり、夫れ然り知らず我邦民權

退助伯

自由の今日に盛なるは抑何者か之が起因を爲し何者か與て最も力ある――、固より天意人心時勢の然らしむる所なりとはいへ彼有名なる民撰議院設立の建議こそ其起因にして江藤、副島、後藤、板垣の諸君こそ、實に與て最も力ありし者と謂べし、然るに惜ひ哉江藤氏は端なくも刑場一滴の露と化し去て九原呼べど答へず、副島氏は再び青雲に登り玄色車上蓬髪を撫して又民權を口にせざるより斷然朱門を出で今に民權自由の伸張を期圖せらるゝは伯と後藤の二君のみ、世伯を稱して自由の泰斗、民權の元祖となす又た所以ある哉、

伯名は退助、土藩山内氏の世臣にして其人となり忠勇剛直信義に厚し、夙に勤王の論を唱へて國事に奔走し維新の邦圖を贊し中興の偉業を翼け、征東の役伯實に其參謀にして嘗て勇を會津に奮ひ、西、鄉木戸、大久保等の諸君と共に維新の元老明治の功臣と稱せられ、爾來參議の顯職に任じ尚國家の衡に當りしが明治六年征韓論の起るや議合ずして西鄉君等と共に冠を掛て故山に歸り尋で副島、後藤等諸君と民撰議院の設立を建議す是實に我邦民權論の嚆矢なりとぞ、然るに翌七年大阪に德星會なるものありて伯及び木戸、大久保、伊藤、井上等の諸君相會し大に國家の爲に議す所ありて伯又た出で再び顯職に復し彼の明治八年立憲大詔の如き伯與つて最も力ありしと、左れど官海一種の潮流は兎角南海自由の風潮と混じ難きにや孔廟未だ暖ならずして伯又た朝を去て爾來斷然民間に在て國利民福の增進を圖

り傍ら學社を設けて子弟を薫陶せしより人皆其高義を感じ風を望み采を慕ひ爭て其弟たり子たらんとし當時立志社の聲勢は隠然關西を壓し將に進んで天下を動かせり、特に彼の自由黨の起るや伯其總理の任に當り增々百折不撓の精神を奮ひ身親から艸莊を穿て四方に遊説し山の險、河の難、曾て毫も厭はず自由の爲には性命をも犧牲となして熱心せられしより天下翕然として民權を論ずる者日に月に增加し其之を論ずる者皆伯を仰ぐ泰斗となし、自由の南針を執るものは蓋し板垣伯にして自由は伯の構造物の如く亦專賣品の如く其威名は芙蓉の峯よりも高く其風評は鳴門の沙よりも喧しかりしが一盛一衰は數の逃れざる所なる歟伯が歐洲を漫遊して歸朝せられし頃より世間の不景氣と共に政黨の熱度は次第に薄らぎ一時運動の活潑なる恰も春田に雨を得たるとし一般都鄙到る處政談の聲囂々と蛙鼓の觀ありしに拘はらず、十六七年來頓に萎靡衰頽して政論社會は西風一陣何處も仝じ秋の夕暮となり果て、筆頭焔を逆らし炎々祝融と威を爭ひし新聞記者も、口角火を吐き赫々帝炎と嚴を競ひし演説家も、絲を絶ちたる紙鳶の如く渚に漂ふ捨小舟の如く風に颿り雨に打たれて零落見る影もなく、さしも盛なりし自由黨も南海積雪の日光に照されし如く盡く消解し、去るより嚇々たりし伯の威望も千卿の枯るが如く水葉の落るが如く自から聲勢を喪ひしも歳月は人をして再生復活せしめ必要ゝ人をして蹶起奮勵せしめ今や政海の風潮は日に月に切迫して人心激昂輿論

嚣々將に政海第二の變動を來さんとするより天下万民又もや伯の一舉一動に注目し望を屬せざる者なし、然るに伯は曾て一片の意見書を禁闕に呈せしのみにて今尚ほ高知山間に隱遯し未だ頭角を政波狂瀾の中に現はさゞるを以て人をして往々杞憂を抱かしめ甚しきに至ては死灰既寒寧亦燃の評あらしむるは伯の爲め寔に惜むべしと雖もこれ豈に伯を知る者の言ならん、伯の議論の直截單純にして其心事の剛毅潔白なるは十目の見る處十手の指す所にして伯の君を思ひ民を思ふの念は身の都にあると鄙にあるとに論なきなり、或人嘗て伯に利を獲て後民權論を唱へんことを勸めしに伯首を掉て曰く余は民權論を商ふことを欲せず余は唯此論と共に倒れんのみと伯の人となり想ふべし、

前年朝廷元勳を賞して特に伯爵を授けらる伯感ありて再三之を辭すれども聽されず其聖意に背くを恐れ終に感泣恩命を拜せられぬ、左れども自由民權の持論は確固不動盤石の如く毫も渝らずと

世或は自由黨中には粗放の癖人、過激の論者多きを以て彼是其全体を批難する者あれども其粗放過激なると共に猛進敢爲の勇氣と熱心の運動は中々に他黨の企て及ふ所に非ざるなり、隱謀は惡むべし謀反は惡むべし然れども公明正大なる政治上の運動は決して忌むべきに非らず、而して此の運動の道を開きたるい抑何人の力ぞ實に是れ自由黨員否な寧ろ土佐人士先登の功にして上は民撰議院の建白を始め立志社の建白、愛國社の設立、國會開設の請願、政黨

の組織に至る迄凡て其天下に先ち荊棘を除くの偉功は常に土佐人士の任する所にして我邦政界の運動上最も熱心盡力し最も辛苦艱難せる者自由黨に非ずして將た誰かある——、夫れ然り板垣伯の功勞豈に容易ならん然るに翻然山間に隱遯して今尚ほ午眠を貪るが如きは抑何故か何ぞ當初の熱心に似ざる、是れ世間往々伯の心事を疑ふ所以にして怪訝の生する亦た無理ならざれども畢竟胸中功名富貴の情熱を以て充滿たる自家の卑劣心より割出す疑にして虛心平氣其出處進退を看れば、困難危迫の時期に進み平和寧靜の時期に退き、荊棘を破りて坦途を讓り、力を致して功を辭し、翻然些の情熱をも止めざるが如き、心事平生自己一身の功名なく、自己一家の富貴なく眼中唯國家の犧牲てふ

一公明正大的あるのみに非ずんば誰か之を能くせん、某雜誌の冒て所謂政治社會の俠客とは實に伯の謂にして殆んど破壞の任を了り稍く建設の功を握らんとするに垂んとして忽焉其地を避け南海の濱伍を漁樵の間に同ふし一尺の釣竿唯自由の風月に嘯て敢て功名富貴を釣らざる、之を彼の政治を以て功名の器具となし富貴の術數となし營々世に阿ねる藝妓的政治家に比するときと其優劣果して如何ぞや、心事の光風霽月にして一点の翳雲なき將た何の疑か之れ挾まん、其氣品の存する所知るべきのみ

然りと雖も我邦現時の情態は政海の一大段落とも稱すべき國會の新舞臺、將に目前に來りて立憲自由の新社會を見る遠きに非ざるも前途の晴雨如何は豫め定るに由なく加

之而已ならず内治に外交に咫尺に迫るの困難一にして足らざる、政治社會の俠客たる者豈に袖手傍觀するの時ならんや、吾人は信ず日本今日の形勢は假令俠客其人にして庚申塚上の三猿を學ばんとするも義俠其の心の決して許す所に非ざるを――、悔ひ改めよ天國は近づけり一竿更に成周八百年の太平を釣出す今を捨て果た何の時ぞ、嗟起よ板垣伯勉よや板垣伯々出でずんば天下國家を奈何せん天下國家を奈何せん

後藤象二郎伯

其議論を聽けば何となく亞細亞の英雄然たる氣色あれども其擧動の活潑にして泰西的なるは後藤伯得意の長所とも謂べく且其聰明にして權略ある融通にして敏捷なる今世多く其比を見ざる一大政治家にして維新の際人物を評する者木戸大久保の二君に非ざれば必らず伯を推す所以なきにあらず海外人と雖ども常に伯の氣象を驚歎せるとか、伯曾て負ふ所の債内外鉅万を嵩ね進退維谷まるの境遇に陷れり、然るに猶自若として毫も憂ふる所なく曰く庶民にして外債百万ある者我一人のみと、伯の所業往々此の如し故に人或は伯を目して大山師となし之を斥る者あれども新に維大の事業を興す者誰か山師たらざらん唯成功も得ると得ざるとの別あるのみと謂べき歟、伯又性磊落不羈物に拘々せず前年朝廷の在野功臣を錄して之に爵位を賜はるや再三之を辭するあり伯之を聽き微笑して曰く我に其分を併せ賜はれば好かるべしと、板垣伯の之を辭すると

旨趣更に異なりと雖も又以て伯の氣象を察すべし

伯亦た土藩の世臣にして夙に國事に奔走し鞠躬盡力王家を輔佐して明治の新政府を組織せし所謂維新の元勳明治の豪傑にて維新後も參議の顯職に任じ其帥創に係る新政の衝に當りしが明治六年征韓論の合はざるや伯も又西鄉、江藤、副島、板垣の諸氏と共に職を辭し尋て彼の民撰議院の建白も伯其連累にして板垣氏と共に明治政府の政敵中の親玉民權家の古株なり、特に翌年大阪會議より板垣氏は木戸君と共に再ひ朝廷に赴きしが伯は獨り我復青雲の危途を踏む能はずトの冷語を以て之を辭せりと、其より后伯は專ら心を殖産興業に傾け石炭坑の採掘等に從事し傍ら力を政治上にも尽せり、彼の自由黨の起るや板垣伯は投票の多數により其總理に任せられしも板垣伯は之を後藤伯に讓られぬ、然るに伯亦た之を辭して受けざるより同黨員等は更に伯を推て副總理の位置に坐せしめんとせしに伯は斷然之を辭して曰く板垣は久しからずして自由の爲めに死すべし余が其時に至らば自ら請ても總理の位置に坐せんを望むと雖も第二の位置に坐するは余の欲せざる所なりと、流石に共に一黨の首領たるの見識に負かずと謂べし、伯は別に繪を自由黨中に掲げされども板垣伯とは竹馬の友にして其交際深密に共に洋行し共に民權を擴張し間接自由黨に應援して政治上幾分の勢力を有するは疑までもなく人の望を伯に屬する者尠からず、伯も亦臨機應變動もすれば一擲千金の奇功を試みんとしたる者の如くな

りしも未だ著しき運動なき儘其名聲は左のみ喧しからざりしが、一昨年來偶然の事變よりして政治熱の頓に勃興し社會の風潮忽ち騷然たると共に伯も亦た大に憤慨する所あり舊然蹶起多年蘊積せる處の潛勢力を跳し頻に民力休養藩閥掃蕩の論を唱へ大同團結の必要を說き政論てふ雜誌を發刊し以て其機關となすのみならず身親から山河を跋渉し東海東山北陸諸州到る處政友を糾合なす恰も板垣伯の明治十四五年間に於るが如くなるより、自由黨蹉跌し改進黨屏息し志士論客髀肉を嘆ずるの折柄天下靡然として之に應じ車轍到る處具宗大谷氏の過くるが如く、大同團結の勢は疾風の落葉を捲くが如く亦た水の卑低に就くが如く五畿八道何れの所として大同の團結あらざるなく聲威條然政界を壓し遂に後藤伯出でずんば蒼生を奈何せんとの言を發せしむるに至れり盛なりと謂べし、世或は其主義方法に就て種々議論をなす者あれども小異を捨て大同を採るは焦眉の急務にして今日に於て豫め方法手段の細目を規定するハ大同の趣意に非ざる可ければ方法が分らず手段が知れずとの攻擊は未だ大同團結を傷るに足らざる可き歟唯夫れ伯の一身上に就て——從來の經歷上より或は伯を以て政界の山師となし投機者となし、仮令一時と長き尾を曳き空中を荒廻るも彗星と一般始終空中に現はる者にあらず又た軌道の一定せざるより一向に的にならぬとの評に至りては果して誣言なるや將た適實なるや之を知らずと雖も榮爵身に余り黃金纍に滿ち金衣玉食宴安快

樂何を欲してか成らざるなき身を以て寒風を冒し炎熱を凌ぎて東馳西奔轗軻落拓自ら苦むが如き、之を彼の徒に太陽の引力に甘じ煖衣飽食逸居して爵祿に戀々たる他の星宿に比して其差幾何ぞや、吾人は實に其熱心に服し又た其の能く時好に投ずる權畧に感ず、併し伯や其才略に富むと共に亦た多少の瑕瑾無きに非ざるが如し

南洲翁嘗て弟從道伯を評して曰く彼才略余に勝れり此の故に彼遂に余に如かずと、其言の當否如何は吾人之を知らずと雖も伯の板垣伯に於ける才略の一点は亦た似た角のあるなるべき歟、是亦た吾人の知らざる處なれども聊か所感を記して大方の敎を松も昔の友綱の絶ざるをこそ望まし開は兎にまれ角まれ驟雨然たるにせよ、疾風然たるにせよ今の世に治世の能臣亂世の英雄と謂ふべき者伯を措て又た誰かある、後藤伯出でずんば蒼生を奈何せんとの語決して溢美に非ざるなり嗟勉めよや伯

谷干城子

子は奥羽の役に功勞ありき西南の役に功勞ありき、其軍旅的の價直は兒童走卒と雖も皆之を仰ぎ之を敬ず、然れども文明流の政治家としては果して天下の人士が一時噴々たりしに負かざるや否之を知らずと雖も一朝決然官を辭して勇退せらるゝや世を擧て喧々囂々新聞に演說に持囃し一時天下の一大話頭となる豈に偶然ならんや

子名は干城、通稱守部、隈山と號す高知の藩士なり、子幼にして學を好み江都安井息軒の門に入り學成て國に歸り小監

察となる、時方に外舶來航のことありて天下人心恟々たり、子各國に遊び諸藩の動靜を伺察し又た嘗て君命により清國に遊ぶ時に清國既に泰西と通じ碧眼人の居留地あり子其家屋及び其他の構造等を看て夙に大に悟る所あり、戊辰の役大監察となり戰功あり、維新後朝に出て漸次累進陸軍少將に任せられしが唯一將校として名聲左のみ世に知れざりしが、彼の明治十年西鄕翁の反旗を紫溟に飜すや子時に熊本鎭台に司令官として其衝に當り千百日に減するの寡兵を以て四圍援無きの孤城を守り万千日に增す慓悍決死の賊鋒を止む其勢張巡の睢陽に於ける清正の蔚山に於けるよりも尙甚し因て遂に賊を挫て志を中原に恣にするを得ざらしめたり、是より子の勇名滿天下に轟き三歲の兒童と雖も尙且つ谷將軍あるを記するに至れり、事平ぐの後功を以て勳二等に叙し尋で陸軍中將に進み其后學習院長となり華族の子弟を敎育す、子人と爲り溫厚忠直質素を尙び華奢を喜ばず文に長じ武に秀で威ありて猛からず平日之に接すれば渾然たる君子にして親しみ愛すべく事あり舊然起つ時は壯勇なる猛獸も尙ほ恐懼逡巡するの勢あり、それ然り故に政府も亦た有用の人を捨てず十八年廟堂改革の際直に擢で農商務大臣に任せられ、翌十九年歐米各國を巡遊せられしが子の活眼なる大に見る所ありて歸朝后剴切なる意見書を呈し施政上大に釐革する所あらんとせられしより天下万民目を刮して望を屬せしが道の行はれざる、子は遂に斷然大臣の職を擲て故山に歸れり爲に天下

の人心一時騒然たり、但し子の意見たる民情に從て施政の方向を執り事凡て外觀を飾らず質素を旨とすと云ふにありとか、國粹保存は近時の一大流行物にて今日に在ては左のみ珍らしからざれど、子の當時は世は正に歐化心醉の秋なり、ければ子の意見の如きは實に渠輩の心膳に向て爆烈彈を投ぜし如き勢ありしならん歟、汗は兎に角人の朝に立ちて道行はれざるが爲めに身を以て退くとは尋常一樣珍らしくも不審しくもなしとは云へ現今天下一般の人心擧て利祿是れ慕ふ中に獨り蹶然官爵を見ること恰も弊帽を擲つが如きは豈に又た難得の潔士ならずや、吾人は子の國粹主義ならでは夜が明けぬとの保證には未だ俄に首代の印形を捺し難けれども我邦今日の政治家中忠厚篤實の政

治家と云へば必らず先づ指を子に屈せざる可らず否な子を措て又た他に無しと云ふも決して過言に非ざるを信ずるなり、其后君亦た學習院の御用掛を拜命せられしより志あるの士は同院の爲に好師父を喜ぶと共に民間の爲め一大德行家を喪ふを悲みしが未だ一回も昇院せず程なく之を辭して今尚ほ高知山中三徑荒蕪するも東籬菊花あり傲霜晉て舊時の色を改めず陶淵明然たり、左れども子は兎角に隱士の氣風ありて掛冠後直接何等の運動無きを以て人をして是唯一の火の玉の如く一時其運動の烈しきに拘はらず遂に地上に降下しての後は殆んど燒石同樣の効能より外はあらじとの評あらしめ、人をして先きの望みは皆誤まりなりきかとの歎を發せしむと雖も、堅志の人必らずし

も激昂の行を爲さず慷慨を裝ふ者動もすれば失節の迹あり――、吾人は深く子の愛國心に富むを信ず故に早晩其必らず人望に負かざるを信ずるなり、人或は子の○○を惜むものあれども維新の元勳とか明治の豪傑とか稱せらるゝ世の老政事家たる者は大抵天保年代の氣風に浸染せらるゝ者なれば其行爲の瓦角○○○は豈に獨り子のみならんや、

中島信行君

君亦た土藩の人にして舊立憲政黨の總理たり、高知縣何ぞ民權大家を輩出するの多きや、君通稱佐太郎、長城と號す容貌威儀ありて才智と共に衆人に優れ、總角既に經書を藩校に修め後博く諸子百家の書に渉り且詩文を能くす、當時幕府其政を失ひ尊王攘夷の徒四方起り土藩亦た阪本龍馬武市半平太等の傑士ありて正論を藩内に唱へ義黨を團結せしより君も其義黨に加入し銳意王威の陵替を回復せんと欲し阪本氏の長藩に寄留するや君亦本國を脱し之に投じ只管國事に尽力し維新前後王室に勳功あるを以て其後擧られ奏任官となり、尋で官命を以て歐洲に使し大に見聞を弘くし歸朝後租税權頭となり次で神奈川縣令に任せられたり君此任にあるや能く拮据黽勉宿弊を剗除し只簡靖を以て治をなし公明正大毫も曖昧糢稜不穩不當とか言ふが如き忌はしきなきより一縣肅然として一家の如く皆眞二千石を得たるを歡びたりしが政府も又た君の才畧を察して更に眞正に拔擢して元老院議官に榮轉せしむ、然るに當時天下の形勢たる自由民權の説日に月に盛にして天下

の人士到る處相團結し新聞に演説に喧々囂々國會開設の必要を論ずるの勢天地も爲めに震動する許りなるより君も亦た大に感ずる處ありて斷然榮職を辭し去りて故山に歸り明治十三年以來板垣伯と共に東馳西奔自由民權の説を唱へ、彼の自由黨の組織成るや黨員に推撰されて其副總理となりぬ又以て衆望の歸するを知るべし、其后關西自由黨員諸氏の更に日本立憲政黨を團結せらるゝや之が總理たるべきの任中嶋君を措て他に無かるべしとの衆評により竟に自由黨に請て君に總理の任を託せり、但し此黨は恰も自由黨の分家の如く、支店の如く其交際頗る親密にして名こそ異なれ其實は兩黨一黨といふも不可なきなり、其より君は大阪に寓し立憲政黨てふ新聞を發兌し東京の自由黨と東西呼應し專ら民權の擴張に從事し威名赫々たりしが明治十六七年來世間政治熱の一時冷却するや立憲政黨も亦其團結を解しより爾來は余り名聲も喧しからず、其後彼の有名なる女流民權家岸田俊女史と共に西京に寓し、當時は更に居を横濱にトし閑雅靜逸に日を送りつゝあるも君は夙に禪道を學び大に祇園精舍の奥意に通ずるに因み難行苦行勤めて衆生を濟度せんと欲するの赤心は今尚ほ止まず近々更に關西地方を漫遊して相變らず國事に盡さんとせらるゝ由且つ聞く處に依れば來二十三年帝國議會の曉には神奈川縣下より撰出されて衆議院議員とならるゝ筈とか左もあるべく、兎に角君は當時在野政治家の親分株民間黨中の元老と謂べし

片岡健吉君

君も高知縣人にして纍世山内氏に仕へ門閥の席に列し、夙に英才卓識常人の右に出て慶應の初年藩の學校致道館の塾長となり壯年子弟の教育を監督す、時是れ幕末紛亂の際にて藩論勤王佐幕の二派に分かれ正俗互に相軋轢したりしが君は斷然討幕論を主張し後藤板垣等の諸氏と共に忠を皇室に盡し遂に土藩をして薩長と並び稱せしむるに至れり、其后東征の師起るや君亦一方の將校となり板垣伯と共に功を彈丸矢石の間に立て事平ぐの后大參事となり又召されて陸軍中佐に任じ尋で再び高知縣の參事に轉せしが君思ふ所ありて斷然職を辭し板垣伯と共に立志社を設立して後進子弟を薫陶し、發陽岳洋有信修立開成趙遙共行

等の諸社と共に自由民權の擴張を企圖し明治十年更に國會開設の事を建言せり、然るに同年西鄕の亂、高知縣人大江岩神等の諸氏陰に西南の賊に通せんとして事顯はれ捕に就き去時君も其黨與なりとの嫌疑を受けしより遂に禁獄百日に處せられしが出獄後君は益々心を愛國の一點に傾け彼の有名なりし愛國社てふものは實に君其首唱者にして一時社員の多きを殆んど二十萬人に及べりと盛なりと謂ふべし、其後十三年二月國會願望者の大阪に會するや君其議長となり尋で福島縣人河野廣中氏と共に全國有志の總代として東上し國會の開設を請願せしが、時の未だ來らざる乎書空しく入りて意貫かず志士の誠忠は徒に熱血を紙上に灑らして求た九重の天に達せず、加之に彼の請願條

例なるもの、發布せらるゝに逢て忽ち請願受理の門を失ひ如何とも詮方無きより折角の熱望も水泡に屬して遂に空しく故山に向ふて返れり、左れど國事に盡すの精神は百折千挫尚益々屈せず撓まず東西に奔走し南北に馳騁し、曾て明治十四年中島氏と和歌山縣下に遊説し兒玉仲兒氏と國家の事を商議し大に同氏を感覺せしとあり、君の事を爲すや毫も私にせず常に衆と議するを主とするより人々皆な心服し高知人士の君を仰ぐ師父當ならざるなり、君常に曰く我れ他人に評せらるゝ其實に過きたるを慨むと、其衆望想ふべし、然るに一盛一衰は數の逭れざる所なるかさしも盛なりし自由黨も世の變遷に是非なくも一時寢入し如くなるより君も亦故山に引籠り爾來專ら心を宗教にの

み傾け嘗て石破れ天驚くの猛勢を皷して反對黨と舌戰したる口もて無邪氣の小童の如く只管祈禱文を唱へ亦た政波狂瀾の何物たるを忘却したるが如くなりしも世海の風潮は又も君を促して感憤せしめ一昨年來俄然として起ち且何事か政府に建白する爲め東上し種々計畫する所ありしに、何ぞ料らん霹靂一聲志士の頭上に墮落し來りて忽ちに、頃は四極の末方袖に涙の時雨時身に降りかゝる俄かの退去此は御無理と拒んだ爲めに保安條例違犯とやらん云ふ罪にて直ちに石川島の監獄を假住居薩ても氣の毒千万と思ひしが光陰は鐵砲の玉よりも早く瞬く中に一年有余を暮し去て本年二月紀元の佳節憲法發布の大典に際會し勅令第十二號の惠澤に依り芽出度大赦放免の春に遇はれ

しは寔に盲龜の浮木も啻ならずして出獄せらるゝ君の心中如何ならん嬉しといふも愚なれども世の中の現象は未た悉く芽出度く嬉しきものゝみに非ざるを如何せん、吾人は欽んで君等志士諸君の出獄を祝すると共に尚増々聖旨仁恩の辱なきを感佩して愈々國家の爲めに盡されんことを希望す

福澤論吉君

明治今日の荀子とは誰ぞと言はゝ異口同音に福澤論吉君其人なりと答ふなるべし、果して然らば君は近代の一大學者ならんといふに固より學者は學者に相違なきも未だ大の字付くる程の價直は……との評あり、吾人は時折り時事新報紙上に於て其高論を拜聽するのみにて未だ直接材質の淺深如何を測量せしことなきを以て右評の當否如何を驗定するに由なしと雖も若し彼の時事新報に就て――其常に平々淡々たる文字を以て色々樣々の事をイト簡易にイト無造作に談笑する利巧の腕前は中々に他の企及ばぬ所なれども兎角に謹嚴莊重を欠く抔の点を思合せば強ち不當の評にも非ざる可き歟、左れど其名天下に高く其富巨万を累ぬ豈に偶然ならんこれ其智者たるを以てなり、矧んや維新以后二十余年の久しき未だ嘗て膝を五斗米に屈せず三田に慶應義塾を開きて天下の青年を教育し屹然一見識を立つる所實に近代の傑士と謂べし、只怪しむ斯る大家たるに拘はらず其主義の時々變轉して一定せず其説く處常に飄々翩々空中の旗の如く所謂其日〳〵の風次弟とも云ふ

べきは何ぞや、左れど聞く、君賣て曰く余の言論は商賣なり商賣にならざる言論はせざるなり余主義は言論を以て商賣とする者なりと、果して然らば時事新報所説の時に右に轉じ時に左に變するも畢竟商賣上顧客の注文如何に依るものにして君は乃ち拜金主義とか言論發賣黨とか稱すべき一主義一見識を立て通す者なるべし、國會開設の新舞臺將に目前に迫り言論の價直增々△印とならんとすれば將來言論發賣黨の金力ィヤ勢力を得る愈々大ならん歟呵々併し君夙に泰西の文物に着眼し維新前より洋學を唱へて我邦の教育社會に與ふる功勞洪して尠少にあらず、特に今日官邊と民間とに論なく苟も學者論客として世に持離さる、者は大抵君の門より出でざる無くして出藍の才豈に獨り一李斯のみならん、君を稱して明治今日の荀子となす決して不當に非ざるなり

星亨君

東洋嘗てガンベッタあり馬場辰猪と云ふ、惜哉昨秋米國に客死し今は唯ルーソー中江君のあるのみ、然と雖も吾人は尚ほ自由黨中豪邁一のクロンウエルあるを信ず星亨君是れなり、君は元來英國の法律學士にして日本の代言人は余一人なり英の法律を研究するもの東洋亦た唯余一人なりと自尊せらるゝ程なれば、法律にまれ政治にまれ其學識に富まるゝは疑ふまでもなければ時に或は他の壯士輩に率先して自ら虎を景陽岡に搏ち、棒を史家村に振ふが如き學動のあるより看れば學力より膽力こそ君の最も長ずる所

にして學者と謂んより寧ろ豪傑と云ふこそ君の本色にして亦た自ら甘んずる處なる歟、开は兎に角君は自由黨中最勢力を有する人にして彼の一時改黨熱の冷却するや他の先進先輩は往々跡を政界に收めて逡巡辟易恰も敗軍の將が軍旅を談ずるが如く轉た惆悵として死灰一般たるに際し、君は尚獨り殘菊の霜を撐へて秋に傲るが如く野梅の寒を凌で春を待つが如く先輩に殿り後進に冠とし屈せず撓まず其勇を奮ひ或は演說壇上に火華を散し或は燈新聞(後改題シテめさまし云ヒ當時ハ既ニ無ケレドモ)紙上に龍虎を鬪はして專ら自由の命脈を維持し來る中、氣運一變して一昨年來又もや自由民權の勢焰勃興するより君は增々勇を皷し氣を勵まし或は言論に或は集會に畢生の力を盡し且公論新報なるものを

發兌し大に輿論を動かせしが所謂元氣は損氣か其結果は徒に保安條例の突出となりドンと一聲退去の響に身は忽ちに三里以外追放の身となりて晴間を暫し旅の宿さらでも果敢なき其上に洋行し横須賀にて離杯を催す其間又もや警視廳より一寸と來いの命令を受け種々審問の末出版條例違犯の罪にて輕禁錮、重々の不幸の中にも君は豫て代言人中○持の聞へあれば、遣るゝ此身は厭とねど跡に殘りし妻や子はどうして月日を送るやらテフ二上り染た愁嘆は無けれど二十三年は近く目の前に迫りて志士多忙の際なるに徒に鐵窓暗々の中に月日を送くるは如何なる星の廻り合せか局外ながらも氣の毒なりしに天道果して非ならず　皇上仁恩の厚き憲法發布の大典に際して特に大

赦を行はせられ君も芽出度出獄の春に遇ひ嬉しく月日を送るとやら、栃木縣撰出の衆議院議員は君必らず其一人ならん

沼間守一君

君は江府の人にして舊幕府、麾下の士なり、性敏達事務に當りて能く整理するの才あり且つ深く國家の振はざるを患ひ氣節を以て自ら任じ大に尋常人士に異なる所あり、彼の慶應の末年幕府政を失し伏見の一敗より尋で王師征東將に江府に入らんとするの勢に立到るや幕臣の議論恭順、抗戰の二派に分れしが君は飽迄抗戰を主とし曾て同志と恭順論の主張者彼の有名なる勝海舟翁を暗殺せんとせしも事成らず因て江戸を脱して會津に投じ屢々官軍に抗戰せしが天運の循環(じゅんくわん)は人力の及ぶ可きにあらず遂に力窮して官軍に降り謹慎數旬其罪を許され其後土藩の執政板垣伯の聘に應じ該藩の練兵を託せられ去をありしが幾くもなく又東京に返り明治五年大藏省に出仕し尋で司法省に轉任し官命を奉じて歐米各國を歴遊し明治八年歸朝の上更に元老院書記官に任せられしが、當時世の風潮は日に月に自由民權の一邊に傾くより君も亦た大に悟る所ありて明治十二年決然職を辭し彼の京濱毎日新聞に入り社長の印授を佩び又た嚶鳴社なるものを立て演説に文章に專ら自由の旗幟を繖して時事を切論痛議す、特に彼の東京府會議員諸氏が府民の名を濫用して　主上を上野に臨幸を乞ひし一事を攻擊して日報社の吾曹氏と筆戰し之に打勝しよ

り其名天下に高く爾來民權家中屈指の大家となれり、左れど君始め板垣伯を翼けて自由黨を組織し後飜て改進黨に入りて大隈伯に屬せしより世或は君を兎や角評する者あれど君子は豹變を貴ぶとか云へば君は乃ち豹變の君子にして曩昔に幕府に戀々せし意を飜して朝廷に歸順せしと同一般なるのみ、今や井上伯の主唱とかいふ自治黨は冥々の裡に勢力を蓄へ將に改進黨をも凌がんとするが如く現に君の實弟高梨哲四郎氏は自治會員の一人なりとか君よ君亦た一轉自治黨に豹變しては如何ん、其は兎に角君は改進黨中最も勢力を有する人にて言はゞ一方の旗頭とも稱すべく、且つ東京府會議員にして府會中亦た最も勢力を有すと何うか二十三年の曉も其調子に……

末廣重恭君

自家の著作小說中の人物國野基に彷彿として聰明と精細とを兼備ふるの政治家は乃ち他人にあらず鋏腸居士末廣君其人なり、君本姓は都築彼の有名なる都築温氏の舍弟にして豫州宇和島の人なり、性英敏學才ありて少より漢籍を能くし總角にして既に擢でられ藩校の教授となりしが君夙に鴻鵠の志ありて之等の蛙業に滿足せず丁年京都に遊び春日潛庵の門に就き後亦た東京に遊び諸大家の門を叩き、時偶々維新の際にて人心騷々天下皆な武を尙び文を賤み唯爭鬪殺伐を士の本色となすより往々文を捨るものありと雖も君は泰然として文事にのみ從ひ切磋琢磨業更に怠りなく廢藩置縣の后鄕に歸りて暫し縣官となり、後又た

上京大藏省に出仕せしが明治八年其職を辭して更に曙新聞に入り爾來專ら筆硯に從事す、然れども君の名は未だ天下に聞へず所謂知つてゐる人は知てゐる位なり去が當時政府は新に新聞條例及び讒謗律を設け其が爲め世の論者い逡巡辟易舌鈍り筆澁りけるより君慨然と去て此の如くんば言論の自由何の世にか伸びんと少しも忌憚する處なく遂に政府の新律例は嚴酷に失するものと迄論斷し爲めに法に觸れ獄に下る六旬、是より君の名天下に響き渡り曙新聞の聲價亦た頓に高くなりぬ、然るに如何なる譯か出獄后君は曙新聞を去て更に朝野新聞に入社す、左れど自由の氣節は尙ほ腦裡を離れず又もや尾崎井上の二法官を讒毀せし罪を以て鎖窓暗室に繫がるを八閱月、然し君は時々此の如く過激の論を吐くと雖も其人は質素名を衒する人にあらず且邊幅を嫌ふて陽部を飾らず故に井生村楼上雄辯を奮ふの時に在てはグラッドストン氏も斯くやと思はるれど銀坐街頭匆卒に逢へば恰も田舍の戸長さん達の如く見へ性又忍耐勉强の力に富めり、始め君少より漢學に達し朝野新聞紙上常に韓退之ソコノケの文章を掲げたりと雖も鳩舌の語蟹行の書に至りては丸ッ切孩兒と一般一句半言も能はざりしが獄にあるの日偶々同窓の人に就て原書を習ひ其より以后孜々舊師せしより今では一廉の洋學先生となられ、彼の成島柳北翁沒后君代りて朝野新聞に主筆となり增々文壇に力を盡せるより其の名に負かず未廣く英名を天下に轟かし朝野新聞の名聲亦た朝野に冠たり、君

元と自由黨員にして一時議黨の常議員たりしが其屈故ありて同黨を脱し馬場大石等の諸氏と別に獨立黨の旗幟を飜へしつゝ在りしが曾て病痾の爲めに身神の衰弱と共に別段快活の運動もなく隨て朝野新聞もやゝ寐入りし姿なりしも一二年來身体の恢復と共に再び元氣を振ひ新聞に演説に火華を散し龍虎を鬪はして聲價益々隆んなり、唯近頃頗に小説を著はすより韓退之にして碑文なかりせばとの評あれども雪中梅といひ花間鶯といひ未來記といひ何れも大に世人の喝采を博し利潤の多き去年洋行の費用は悉く著述の儲金なりと自白せられし由、然し實際はドウダカ洋行に就ては彼是世評もあれど、要するに君は在野人士中最も學問もあり經驗もある人にて星、沼間、大石、島田、等の諸士と轡を竝べて相馳する一騎當千の政治家なれば歐米より材料を齎しかへらるゝ以上は嘸かしと思はる、知らず果して然るや否歸朝せられしと聞くのみにて未だ一月たつや立たざる今日なれば其邊何とも知るに由無し、只聞く歸朝后は久しく筆を執りおられし朝野新聞を辭して新に東京公論社に入られしと、朝野新聞の爲め寔に惜しむべし

福地源一郎君

天保年間の生にして明治の奇才子と持囃さる、者は乃ち櫻痴居士福地君其人なり、君元と長崎の人にして幼より敏才書を好み長するに及んで放縱不羈なりしが安政年間長崎奉行某其才を愛し携へて東都に歸り其世子の近侍となし時に歳十八、君依て謝資に乏しからざるを得世子と共

に花街柳巷に留連相樂しみしが其間亦た杉田巽作等の諸士に從ひ蘭學を修め且つ英佛の書をも研究せるより遂に擧げられて幕府の臣となり外交の事務を執るとなりぬ左れど君の放蕩は增々己まず南品北廓柳橋新橋の別なく苟くも紅粉の臭味ある處は車轍至らざるなく終に遊里に於て殿樣の稱を得殿樣といへば君なるとを知る近時の吾曹氏の如し、然るに一朝幕府の倒るゝより君も詮方なく、無官無祿の素浪人となり曾て江湖新聞を編輯せしが言偽々官の忌諱に觸れ暫らく獄に下り、其後明治二年大藏省に出仕し尋で伊藤芳川の二君に從ひ米國に赴き又た岩倉大使に隨行して再び泰西各國を巡回し益々見聞を弘め歸朝后東京日々新聞に社長となりて爾來專ら世の耳目を以て自ら任じ文筆にのみ從事し、名聲頗ぶる隆し、左れど君始め屈指の民權家にして隨分過激の言論を吐きしに拘はらず忽然中變して官權家となり、明治十五年彼の東洋新報の水野寅次郎、明治日報の丸山作樂の二氏と立憲帝政黨なるものを組織し頻に官權を主張するより種々世の攻擊を受けぬ、タガ官權云々を除いては實に絶世の好才士にして善く世事人情に通して旨く世の中を立廻らるるより大に世に用ゐられ、東京有名の諸會社は大概君の名有らざるなく、且つ再び東京府會の議長となる等流石に明治の奇才子なる哉、畢竟才子なればこそ時々翩々飄々として梅に鶯ひ櫻に靡き松の操は野暮らしとて取合ぬならん歟、併し有名になる日報社も如何なる風の吹廻しか近來面目を改めて不羈

獨立との着板を掲げられたり、其の改革と共に君は社長の任を少年才子に讓つて政治社會を退隱し更に文學社會に顏出されたり、もしや艸紙を著して世の喝采を得られたり、君の爲めには野暮に堅ッくるしき政治社會より粹な文學社會こそ其驥足を伸すに好都合ならん

中江篤介君

快男子——快男子——海南第一傑出の快男子とは誰ぞ吾人は信ずルーソー中江君其人なるを、君亦た土佐人士にして兆民居士と號す、夙に佛國に遊び歸て外國語學校長となりしが后官を辭し佛學塾を立て後進子弟を薫陶し豫て日本佛學者の泰斗と仰がるゝ碩學なり東洋のルーソーと呼ばるゝ、大家なり、然るに去とは妙に生來一種の仙癖ありて洒落遺幅を嫌ひ胸に錦繡を蓄ふれど膚に尺寸の絹布だも着けず常に蓬髪乱縷ヒョコ〳〵然として一見田夫野人の如く、且最も酒を好み劇飲大醉しては放然身を物外に處するが如くなれども時に或は壺を叩き杯を擲て悲歌慷慨燕趙人士の如く憂國の念未だ嘗て頃刻も忘れず、夙に勇壯快活の民權論を唱へて自由黨の遊軍となり又た常に板垣伯の秘書官の如く顧問官の如く多年自由民權の爲めに力を盡しつゝありしが、一昨年末保安條例の出るや君亦た治安に妨害ある者と認められ三里以外へ立退の身となりしは君が弄文に妙なるより端なく鬼神の怒を招きしもの歟、抑も亦た君の酒に於る量なくして乱に及びしが爲めか、君は兎に角うれが爲め花の都をまよひ出で芦が散てふ涙華津

に流れ渡り爾來東雲新聞論壇に在て牛耳を執り瑠々樣太の筆を振て奇思妙想を吐露し聲價頗る高し、君奇行の話柄となるもの最も多し特に貴顯の面前に出るも貧生に對するも別に區域を立てず恒に笑踞談笑して洒脫然たるは遠く凡人の及ばざる所なるべき歟、要するに君の人を爲りたる周――君を評して謹嚴周到の政治家となさんは未可なれども大膽奇拔の政治家單純硬直の議論家としては祇今恐らくは君に及ぶ者少なからん、稱して關西新聞記者の泰斗となす豈に溢美ならんや

矢野文雄君

世間評して云ふ改進黨は利口なる人物の集合体なりと、然り而して其中尤も利口の聞へあり――は東洋小野梓氏なり――が惜ひかな氏は前年十万億土遠行の客となり其後氏に續て利口と稱せらるゝは乃ち矢野文雄君なり、君舊佐伯藩士にして夙に英才卓識の名あり明治四年君年十九にして初めて都門に上り彼の慶應義塾に入て英學を修めしが致々勉學故を以て入塾以來未た二星霜を出でずして忽ち舉けられて該塾の教授となり、其後更に報知新聞社の聘に應じ該新聞に從事せしが明治十一年政府君を擧けて大藏の少書記官となす措大より飛で六等官となる君の才知るべし、其後漸次累進して太政の大書記官にまで昇任せしが同十四年の冬大隈伯が現政府と議合はずして冠を掛けらるゝや君も同論者なるを以て亦た其職を辭して爾來大隈伯を扶けて改進黨を組織し身は報知新聞に長として大隈伯の

機關を以て自ら任し數年來蘊藉せる處の明論卓說を吐きしが君の文章たるや過激に渉らず温柔に流れず理義精確にして可もなき不可もなき處に却て妙味あるより大に世の賞する處となりしが其后君亦た泰西に渡航し歐米より歸朝後更に君は報知新聞を改革し直段を安くし記事を平易にせられしより社運は增々盛ならんと思の外改良の割合には賣高少き由、此は其紙上重に君の歐洲紀行を以て塡塞せられしより報知新聞は君の漫筆新聞なりとの名を得しによるとか果して然らば弘法も筆の誤と謂べし、世或は二十三年國會開設の曉も君は猶ほ議場に於て漫遊の奇話を演說せらるならんと云へど眞逆……、其後君は何の思ふ處ありてか飄然隱遯せられたり、然し東海散士の淸見寺行と一般ホンの暫しのをにて近時改進黨の時を得顏に動き出すと共に又も俗塵界へ這出し今尙ほ相變らず改進主義を擴張なしつゝあるよし、君の改進黨伯に於る關係は、彼の中江栗原植木諸氏の自由黨伯に於る、大石氏の大同團結伯に於る、古澤氏の自治黨伯に於ると一般、所謂入幕の賓とも言ふべきものなりとか、

大井憲太郎君

河野廣中氏が福島事件を起し自由黨員國事犯の嚆矢を爲してより以來高田、加波山、埼玉、飯田、靜岡、等黨獄續々と起りしも其中につき其關係の最も大に其名聲の最も高きは大阪事件乃ち大井君の國事犯なる乎、君常に吾こそは佛學に通曉して深く法律の原理を考究し、元老院書記官の職

特に實務の熟を効し、曙新聞の筆大に我邦の風潮を進むるの技倆あるを以て今日の代言人中誰知らぬ者なき地位を占めたりと云はぬ計りの風をなすが如く見られど此れ其の本分の性質にして彼の徒に鞭を捻り口を曲め威嚴もなきに故に威嚴を恥ふ天麩羅紳士の比にあらず、親しく其人に接せば淡々泊々書生風を帶びて毫も高慢ならず、殆んや假令少しく傲慢なるも隨分それだけの腕前あるをや、彼の自由黨の組織なるや君は馬場大石竹内諸氏と共に常議員に推撰せられ黨中屈指の熱心家にして特に壯士社會の人望よく君亦た能く書生を發ひ貧なる者は往々に之が方向を定めしむ宜なり一度び手に唾して起てば數十百人の生命を犧牲として之に附隨するもあるは――、大阪事件の可否得失は之を知らず左れど君等は惡事を做さんと欲して惡事をなすの惡人にあらざれば吾人は實に其心事を憐む者なり君曩日に大阪臨時重罪裁判所に於て審問の末輕禁錮六年に處せられ之を不當として大審院に上告し一旦原裁判破毀なりしが又もや名古屋重罪裁判所に於て重懲役九年に處せられしより大審院に再上告せしも採用せられず、爲めに吾人は愛國義膽の士の其遂に鐵窓暗冥の裡に朽死せんを悲しみしに定役に服する僅々數日ならずして忽ち本年勅令第十二號により青天白日の身となられ名古屋より一旦大阪へ來り其より更に久し振にて鳥が鳴く東の都へ立還られしが不日大阪に轉籍して二十三年には大阪より帝國議會に出つる豫考なりとか、虚實如何は知らさ

れども君の如きは帝國第二の都會撰出の議員とするも決して恥かしからざるやに思はる

柴四郎君

有下踏二東海一而死上耳との高言を吐て秦軍を五十里外に却けし齊國の烈士魯仲連も斯くやと思はる、我邦近代の快男子は此は是れ東海散士柴四郎君其人にして抑も君の人と爲りたる支那出來の賈誼屈原を摺味となし和製高山彦九の衣を掛け舶來のクロンウエルの油で揚げ〻天麩羅的の如く悲歌慷慨の氣象は其文章によりてトすべく、經世濟民の伎倆は谷大臣のお眼鏡に叶て一足飛に秘書官となるによりて知るべくして東海散士てふ名は佳人の奇遇と共に盤梯山よりも高く猪苗代の湖よりも清く、特に谷大臣の冠を掛けらるゝや君亦た斷然榮職を擲て僻地に隱遁し明治昭代に珍らしくも伯夷叔齊をきめ込しより人愈々其高節に感じ評判增々盛なりしが流石の散士も餓死する迄の覺悟はなかりしか將また浮世の羈絆の逃れ難きにや、新聞紙上悪遜廣告の未だ消へやらぬに早やノコ〳〵と首陽山より這出せしは兎も角も、其遂に浪華の土地までさまよひ來り彼の藤田、兼松、玉手、等諸氏の機關とゐいふ大阪毎日新聞に主筆となりしより前の稱賛の聲は乍ち罵詈の聲と變じ大に世の批難する處となるも道理、元來此の藤田氏等は世の所謂寵商とか御用商人とか云ふる、のみならず既往の因緣より推せば正しく井上伯の自治黨に編入すべき人種にして所謂歐化主義なれば國粹保存主義なる君とは氷炭宿

ならざる中なるに斯く親方となり手代となるは如何なるセメントの効用にやハテサテ合點の行かぬ咄しならずや知らず藤田氏等は散士を利用して暗に自己の便益を圖らんとするもの歟、將た散士が藤田氏等を籠絡して時に自己の主義を擴張せんとするものにや、兩者の胸中には定めて何等か隱微の情のあるならん、左れど試に毎日新聞を採て其の常に骨董肴然として何れを味ふて善いやら分らぬ處を見れば、散士の清廉なる朱に交るも容易に赤くならず藤田氏等の機敏なる又た容易に他人の提灯をのみ持たずして未だ互に籠絡し得ざるが如し非歟、世或い頻に散士を攻撃して偏に寵商連に閉口頓首再拜して只專ら辯護の御用達をのみ勤むるが如く罵るに拘はらず吾人は散士を信

ずるの厚き强ち左樣とのみ思はざれども亦た曾参の母たるを免れず、矧んや新に沐する者は冠を彈き新に浴する者は衣を振ふとかいふなるに米國理財學士との肩書を有する會津藩中チヤキ〳〵の才子にして將た何を苦しんでか彼是世評を受くる汝ゃ社會に立入るものゞ吾人は實に住人の奇遇の著作者其人の爲めに惜む散士の氣慨なる豈に之を思はざらん、聞く散士は近ゃ同社を退き歸京すると、風説固より信するに足らざれど吾人は自治黨の爲め國粹黨の爲め、藤田氏等の爲め、散士の爲め、希くは其然らんことを勸告する者なり

河野廣中君

國事犯とし云へば殆んど自由黨の特有産物の如く必らず

其黨員中より飛出す而して君の福島事件實に之れが嚆矢と云はざる可からず去とは奇妙な先祖となられし者かな君舊三春藩士にして斯く國事犯の親玉とも呼ばるゝ慷慨家なれども其人と爲り温厚沈着にして輕躁疎暴の擧動なく且性至孝信義に敦く、左れど能く物に忍耐して其志を達せざれは止まざるの風あり、彼の自由民權の盛んなるや奥羽中に於ては君亦之が首唱者にして曾て高知に赴き立志社中に於て片岡健吉氏と併稱せられ、且國會願望者の大會に會するや君其率先者となり片岡氏と共に上京し國會開設を請願する抔專ら力を自由民權に盡し一時雷名嶺堂を也震動せしめたり、其后君鄉里に歸り縣會議長をも勤め名聲愈々高し、左れど身唯國事にのみ奔走して家産を事とせ

ざるより遂に產傾き妻子凍餒を叫んとするに至れり、然るに君尙聒聒として之を顧みず增々力を國事に盡せしが一時政治熱の冷却と共に自由黨も萎靡振はざるを嘗激し熱心の餘遂に如何なる拍子か靑天白日に忽ち霹靂を飛ばすが如き擧動となり、料らずも明治政府に無數の心配と非常の厄介とを被らしめ身も亦た鎖欄石窟の客となり爰に空しく數年を送りしが這回端なくも大赦令の爲め無事出獄更に自由の天地に再生せられたり、福島縣代議士の任君に非ずして誰ぞ、君嘗て入監中謹愼を旨とし品行他の囚人の模範となるより傳告者に命せんとせしに君辭して曰く余は今日の政府と反對の点に立つ者なれば假令獄吏の片端と雖も身を入るゝを好まず、君の志の堅固なる思ふべし、世

の深沢政治家果して以て如何となす

尾崎行雄君

昔し韓の張良と云へるは容顔婦人の如き美男なりしが其志氣は彼朝の關羽も我邦の清正も三舎をさけの粕とも尻とも思はぬ位の豪傑なるより人は看掛によらぬ者かなと太史公も言ッたとか、夫れと之れとは月と鼈到底同日の咄には非ざれど其容顔は張良に彷彿たる一個の好男子にして正しく温柔郷裏の玄徳婦人政略の孔明とのみ想はれざるに其氣概に富み議論の快活なる改進黨中にも珍らしき壯年政治家なりとの評あるは尾崎行雄君其人にして、君元と報知新聞社員なりしが前年該社内閣破毀の際脱走組に加はり其后朝野新聞に入社し増々勇壯活潑の運動をなし壯士社會の評判甚だ宜かりしが夫れが爲め亦た一方の評判よからざりしにや、一昨年末保安條例の出るや君亦た江戸勘當の身となりしが遂に立退序に奮發して心強くも最愛の細君を振棄て八重九重の都を後に海外万里へ旅立れしは寔に天晴壯年政治家の親玉、猶此上に歐米にてコヤクり研き立てられんには無かるべしと思はる、併し吾人の豫想の果して中るや否其邊は今日より首代の印形を捺す能はざれども智勇兼備の尾崎君其人のをなれば決して彼の所謂座頭の京上り然たるとはあるまじ

杉田定一君

明治今日の梅田雲濱とは誰ぞ問はずして知る杉田定一君其人なるを、君若州の人にして夙に自由民權の伸びざるを

憂へ慨然身を北海の一小濱に起し一杖天下を周遊して到る處自由を唱へ民權を說き屢々危險を冒して顧みず時に水火に吟じ時に風雨に嘯くに至つては人を忘て覺へず毛髮竪立せしむ、君常に腕力を重んじ特に暗殺論を唱ふ左れど好んで粗暴を爲す人にあらず只腕力を以て道理の保護に供せんと欲するのみ、曾て思立つとありて東京より大阪に赴かんと函嶺を越へしとき彼の今朝死別奥生別唯有皇天后土知てふ句を憶起し此の山再び踰も可からざるかと覺へず自ら慨然たりと、君の如きは實に自由の熱心家と謂へし、其后君政況を視察する爲め歐米に渡航し爲めに北海の政波一時寂寥たりしが昨年歸朝し爾今福井縣會の議長となり尙ほ相變らず東馳西奔熱心に自由民權の伸張を圖り且近時頻に大同團結に從事し北海の政波又騷然として君の爲めに活潑の色を顯はせりと嗟盛んなる哉、梅田雲濱辭世の歌にいふ「君が代を思ふ心の一節に吾が身ありとも思はざりけり」と知らず君亦自由の爲めには吾身ありとも思はざるにや

鹿島秀磨君

君は兵庫縣淡路の人にして舊德島藩の偉人と知られたる故大村純安氏の遺弟たり、曾て慶應義塾に入學し尋で該塾の教授となり都門に止ること七ケ年なりと雖も曾て官海に浮かまず、明治十二年故山に歸り爾來專ら心を民權に傾け遠に同士と神戸に於て神戸新報なるものを發刊し身該新聞に主幹として改進主義を擴張し且兵庫縣會議員となり

て政海に遊泳せしが其后同新報廢刊後議員をも退き專ら身を神戸商法會議所にのみ委ね政事上には一向無關係にて音も香もなかりしが昨年再び縣會議員に當撰以來又も頭角を政海に見はし特に近時は政友てふ雜誌を發刊し身其編輯を主さどり又專ら改進主義を主張せり、君性温厚思慮に富み兵庫縣下に於ては先づ第一流の人士と謂べし、故に神戸區撰出の國會議員は必らず君其適任ならんと改進派の人は言ひ居るよし

栗原亮一君

平民主義の一大木鐸たる東雲新聞論壇に於て兆民中江君に次で英名夙に煥然として天下に噴々たる者は誰ぞ乃ち亮一栗原君其人にして、君の人と爲りたる温厚君子の風あり左れど慷慨大志あり、和するときは金谷の須賀たるも激するときは鴻門の樊會然たり、曾て立志社の聘に應じ高知に在て有爲果敢の壯年を激誘すること年あり、此よりして板垣伯君の才を愛し君亦た伯の人と爲りを慕ひ爾後中江君と共に板垣伯入幕の賓の如く自由黨の參謀の如く事々翼賛して其功勘からず、板垣後藤兩伯の洋行せらるゝや君亦た隨行久しく歐洲に在て益々見聞を弘め其後暫らく身を南海に潜めしが我邦今日の事態は有爲君の如き傑士をして長く臥龍たらしむ可きにあらず、前々年來又も頭角を政波狂瀾の中に現はし東馳西奔文章に演說に益々自由民權の擴張に盡力せられ民間黨中現今の花方連と云はゞ必らず指を屈せざる可からざる名家なるに去とは妙に幣温

袍の子路を學ひて邊幅を修めず路上勿卒之に逢へば何物の窮措大か路に迷て彷徨するかと思はる抔實に中江君と好一幅對と云ふべし、宜なり其交り水魚の如く終始議を同して渝らざるを――東雲新聞の起る君亦た中江君と共に操觚の任に當り筆頭烟を逃しらして侃々諤々今尚ほ現に關西の言論社會に隱然一敵國の觀をなせり、嗚呼中江君ありて亦た君あり世東雲新聞の稱して燕趙人士の巢窟となす亦た理ある哉、君元と三重縣志摩の人なり、左れど久しく岡山縣に在て同地は實に君の第二の故郷なりとか

荒川高俊君の

「ンボー」の演說は北米十三州の獨立を得せしめ、ガンベッタの一言能く佛國を動かす、三寸の舌頭一國の治亂を容易なちしむ此の如き一言一語又た貴重なる哉、然りと雖も口は所謂禍の門にて惡くすると集會條例の爲めに時々お目玉を頂戴するをあれば謹まざる可からずトはいへ爲めに禁止禁錮の嚴命を被るもの往々有之て珍らしからぬとなれども我邦演說禁止の嚆矢と申すべき者は誰ぞ問はずして知る荒川高俊君其人なるを、君當時は彼の有名なる北辰社員にしてお目玉は偖か明治十三年某月井生村樓の演說會に於てなりとか然るに君の自由民權に熱心なる猶ほそれに懲りず舊東海曉鐘新報記者たりし時靜岡縣下に於て彼の前島豐太郎氏と共に又も演說の爲に一大失策を仕出し前島氏は二年の禁錮三百圓の罰金に、君へ三年の禁錮九百圓の罰金に處せられたり集會條例發布以來未曾有の禁

鋼無比の罰金なりとか、左れば君は啻に演説禁止の皮切のみならず、又た嚴罰の親玉にして實以て氣の毒千万ながら其が爲め雷名天下に轟き自由黨中此人ありと知らぬ者なきに至りしはせめての幸と謂べき歟、兎角する中光陰は流箭よりも早く三年の期滿ち無事出獄に逢ひしは明治十八年のことにして其際井生村樓にて芽出度出獄祝の演説を催ふし爾來猶ほ東京に在て相變らず言論社會に身を寄せ居られしが一昨秋又々秘密出版の件とかにて其筋に招待せられ裘飯の馳走に預り爾後一年有余を經て稍々本年二月彼の勅令第十二號にて大赦放免せられたり、一度ならず二度三度政府の御厄介となるも國を愛する熱血の逆上より起る仕事なれば其心事は憫むべく其勇氣は感ずべけれど物言へば唇寒し秋の風、何うか可成的國家の爲め御自身の爲め自愛自重せられたし

附錄

大隈重信伯

伯及び井上伯は共に在朝の顯官にして前記諸名士とは別世界の人なれども一い從前嘗て改進黨の首領となり一は將來或は自治黨の首領なりとかいひ何れも現在の政黨に關係無きに非ざるやに思はるるにより爰に附錄す

漢の高祖が天下を定めたるの時に於て會計を掌り金穀を運用したる蕭何を以て第一の功臣と爲したるは理財の困

難を知ればなり、而して其困難なる財政特に困難なる日本維新以來の財政を整理したるは抑何人ぞ、日本の財政は實に左の三君の手に於て整理せられたり、第一由利公正君第二大隈重信君第三松方正義君是なり、同じく維新以來とはいへ其時の前后により難易の差等はあれども何れも困難なりしは掩ふ可からざるなり宜なり世人の大隈伯を稱して今世英傑の一人となすや、伯元と佐賀藩士にして幕府の末年廣く交を天下の人士に結び王政復古の偉業伯亦た與て功あり、爾來朝に仕へて維新の政を補く、而して伯は特に財政の術に長するを以て終始政府の財政を擔當し能く國庫を富ませり、啻に國庫を富ますのみならず又能く自家の金庫をも富ませしより之が爲め世間或は……ィヤ何れも

其經濟の道に巧みなるを感ぜり、只怪しく思ひしは維新以來彼の征韓論を始め時々內閣に軋轢ありしも伯は常に現內閣(乃チ西鄕板垣等反對者ヲ除クノ意)のお味方なりしに去る明治十四年に至り俄然參議兼大藏卿の顯職を捨て勇退せられし一事にして世人の之を聞見するや皆驚かざるなく誠に此の人にして此の擧あらんとは——特に其骸骨を乞ふや直に政黨を組織せらるゝを以て穩かならぬ擧動なりと評す者あれども伯の如きは朝に在るも野に在るも唯國利民福をこれ主となす人なれば其朝を去るや毫も猶豫する所なく政黨團結に從事せらるゝは寧ろ感ずべきなり何ぞ怪しむに足らん世人又或は改進黨は怜悧なる色々の人種が官海の風波や民間の刺衝により無余儀集合したる

者にて恰も秋風に捲れたる落葉の堆をなす如く春水に漂ふ浮草の群をなす如く風の吹くまに〳〵水の流るゝまに〳〵自然の行き掛りより塵積で山をなせート一般なれば假令綱領を飾て文章の巧なるに誇るも論説の巧なるを以て人を瞞着するも決〳〵て共に爲すあるに足らずトいふ者あれど是れ亦た畢竟妬言ならんのみ、看よ彼の改進黨も一時其勢力の盛んなる中々に自由黨に一歩を讓らず、伯の老練縝密にして政治上の經驗に富む能く世の柔和なる改革家を籠絡〳〵彼の温順なる學者紳士の徒は多く伯の麾下に屬するを以て假令勇壯活潑の運動はなきも却て此黨こそ國會開設の曉に於ては議場の多數を制すべく此伯こそ民間黨の棟梁なり指揮者りト世間の之を望むや恰も北斗大星の如くなり〳〵に豈に料らんや太陽引力の強き此の大星も俄然と其の引力に吸付けられんとは――、伯は翌日に俄然冠を掛て人を驚かし這回は突然冠を着けて人を驚かせり去とはよくも人を驚かす人なる哉然〳〵是れ乃ち英雄の英雄たる伎倆なる歟、其は兎に角伯は既に出たり、昨年來麟閣の人となり終れり併〳〵其主義は如何せーず、伯の入閣せ〳〵に付ては世間の廣き其中には種々の評もあれど吾人の聞く處によれば始め伯の冠を十四年に掛けらるゝや改進の主義を主張〳〵其議論聽かれずして退かれたるよ〳〵、果〳〵て然らば今日伯の内閣に入らるゝや又た此の改進主義と同伴なるを問はず〳〵て知るべ〳〵――此の主義を以て退く者は又た此の主義を以て進まざるへからず、其の退くや此の主義

を以てゝ而して其の進むや此の主義を以てせざれば則ち其人死す、トハ伯の機關新紙すら其曾て公言せゝ處にして若ゝ夫れ退くに當ては英國流の改進主義を以てゝながら其進むに當ては更に獨逸流の保守主義を以てするが如きは豈に公明正大なる政治家の所爲ならんや、トハ云ふものゝ同伯入閣以來既に一年、日たる淺きに非さる其間社會に發表せゝ事物にしてこれと顯然同伯特有の改進政略なりと思はるゝ者有りや無きや亦た彼外交上强硬主義を執るとの一消息のみにて果ゝて口さがなき靑衿輩の五胡猖獗國將レ傾、肉食猶稱眞太平、獨怪謝安出レ山後無二還偉略濟二蒼生一との吟聲を打消すべきや否、然ゝ一時屛息ゝたる改進黨ハ伯の入閣以來却て勢を添へゝ如く特に近時は頻りに遊說員を天下に派出なす抔、種々手を入れ力を盡ゝ專ら黨勢を擴張する處を見れば果ゝて伯は中にありて外改進黨員と內外相應じ益々改進主義を擴張するもの乎、兎に角伯は朝野に跨り勢力を有する大政治家と謂ふべゝ

井上馨伯

歐化主義とい如何なるもの乎、我國の事物にてあれば假令如何程完全に如何程善良なりと雖も之を放棄ゝ歐洲の事物とさへあれば如何程不完全に如何程醜惡なりと雖も之を採納すると云ふにあるか將た亦た歐化といふも唯其の中につき善きをのみ摸撰すると云ふものか其講義はモッセー氏の研究會に讓り爰に辨ぜざれども彼の井上伯の主唱とかいふ自治黨こそ實に此の歐化主義なるよゝ、伯も亦一

主義ある政治家なる哉、伯通稱聞太といひ山口藩士にして性磊落且つ才略に富む彼の幕末長州征伐の際伯は大村益次郎君と共に防戰屢々東師を破り戊辰の際又た戰功あり其后新政府に仕へ諸官に歷任せしが曾て大藏の大輔奉職中財政の事を論じ現政府と議合はず斷然同省三等出仕澁澤榮一氏と共に職を辭し一時興論を動かせり、然るに當時木戸氏は山口に板垣氏は高知に在て何れも官に在らず、伯陰に復古功臣の分離を歎じ種々調停する所ありて遂に彼の大阪會議なる者出來夫れより木戸板垣二氏の入閣と共に伯も亦た官海に泛び明治八年第二回朝鮮事件の時黑田辨理大臣に副として之を處辨し、后參議工部卿等に累遷し尋で明治十三年外務卿に轉任す、此の任こそ伯の英名の最も天下に響きし處にして伯能く泰西の事情に通じ且尤も交際の道に長ず、故に錯雜なる外交事件も伯常に圓滑を以て之を處し曾て英國公使パークス氏より東洋に於て吾を知り吾が親友とすべき人は獨井上氏あるのみとの稱賛を得られたり、併し外人の感服する割合に、內國人は……、彼の條約改正の如き伯が非常の熱心より日に月に捗どり殆んど其成功を見んとするに至りしも其間種々事情の存するありてか世評百出爲めに大に人心を激し宮に人民間の平地に波瀾を生ぜしのみならず政府部內にも隨分彼是議論を生せしやにて九仞の功績に一簣を欠く儘忽ち中止となりしは實に惜むべし（ノッ〈）而して當時の世評にては條約改正の中止と共に伯の決心或は現政府を去るならん抔

言ひしが先づ以て宮中顧問の散官に轉ずるに止まりしは少しく人を失望せしめたれども其后伯は大抵旅行をのみをし各府縣到る處殖産興業地方自治等の演説をなす抔其趣を見れば愈々現政府に望む所なく國會開設の機に乘じ此度は民間より改めて新頭角を現はす積りならんと思ひたりしに是も亦斗らずも大臣の職は僅に一年の休息にて再び入閣したるこそ層一層世人の吃驚する處なりしならん歟、左れど伯は入閣后も尚ほ手を引て隱然自治黨の組織に汲々たるが如く現に東京に在る自治研究會は同黨の下拵なりとか、其他各府縣到る處或は陰に或は陽に同黨の準備らしき團結箇々發生して新斬の割合には中々好人氣なるよし、特に近頃耳にする處によれば伯は今の中に十分黨

員を募り置き國會開設の期に及ば、愈々民間に下り花々しく運動するの心組なりとか、果して然らば自治黨の公然運動するは遠きに非ざるならん、世或は自治黨を冷評して曰く艸茶も出花の勢なりと此言や妬言も亦甚しき者なれば率直なるイヤ疎狂なる吾人も豈に代へて以て批評と爲すに忍びんや、吾人は固より歐化主義の信者にあらざれば強いて自治黨を辨護するを欲せず況んや井上伯を崇拜して十全の政治家とは……、左れど其敏辨多才なるには感服せずんば非ざるなり、看よ彼の世人の嚮望せし黒田伯の入閣を——、又た看よ彼の大隈伯の入閣を——、何れも入閣后は顯然何等かの特効あらんと期したりしに両謝安とも出山后さして著しき事を爲さざりき、然るに獨り井上伯のみは農

商務の大臣と爲るや否や忽ちに同省の難物たり〜「プールス」事件を一方寸間に纏め去り、十州鹽田組合の紛議も少〜は遺憾無きにあらねど先づ程よく處斷〜一種の特効を顯はせ〜にあらずや、吾人は一條約改正中止の爲めに伯を貶して凡庸人と爲さゞると同じく、一プールス事件の爲めに一鹽田事件の爲めに、直に伯を稱〜て奇才子と爲すを欲せずと雖も敏捷伯の如きは豐沛人士中にも多く見る能はざるは經歴上誰〜も信ずる所に〜て其物事に利巧なる熟練なる果斷なる之れを朝に置くも固より畏るべく之れを野に置くも亦畏るべき才子と謂べ〜吁才子なり才子なり吾人は實に伯の才子なるを信ず、左れども才子ならず愚は愚ならずトか云へば希くは徒に自ら慢〜て其才を濫用する勿らんを望むにあらん

（以上記事三月十五日脱稿）

亂世の英雄第一編終

版權登錄

明治廿二年五月二十五日印刷
仝　年五月二十八日出版

定價三十錢

版權所有

著作者　大阪府平民　大西敬太郎　河内國若江郡成法寺村廿五番地

發行者　岡山縣平民　石原孫一郎　大阪市東區谷町一丁目百十三番邸寄留

印刷者　大阪市東區伏見町二丁目三十六番邸　大川仙橋

發兌所　東區谷町一丁目　大和屋

大賣捌所

東京日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛

大坂心齋橋筋南久寶寺町　岡島寶文館

大坂心齋橋安堂寺町　青木嵩山堂

京都寺町通松原南ヘ入　和昌堂

岡山中ノ町　森博文堂

大和屋發兌書籍減價發賣廣告

有信齋主人津田權平先生著述

新刻　人の心中を看破る秘傳

洋裝良製　全一冊　正價金貳圓

製本落成ニ付キ着金次第送本ス

●今回一万部限リ特別大減價　金五十錢ニテ配當ス　尤モ郵税ヲ弊店ニテ悉皆支辨ス　●郵券代用ハ一割増ノ事

物形アレハ影アリ影ノ圓キ者其形ノ圓キ証ナリ人ノ心ハ無形的ナリ何ヲ以テ其正邪ヲ知ラン否ナ〳〵顔ハ心ノ看板ナリ思ヒ内ニ有レハ必ス外ニ顯ハル喜怒哀樂愛惡ノ情人焉ンソ瘦サン哉〳〵只其此レヲ視ルノ疎ナル而已中古人心朴素ナルノ時代ハ情慾熾ンナラス是レカ如何ヲ知ル左マデ必要ヲ感セス又注意モナサヽリシナリ然ルニ今ヤ道德ノ時代ハ漸ク去ツテ虛僞ノ時代ト變遷シ來リ奸邪、譏佞、欺詐ノ徒到ル處ニ充滿シ人目ヲ眩シ財産ヲ掠メントスル者比々皆然カリ豈ニ窗ニ盜賊、掏摸、マンピキカタリ、持逃而已ナラン哉畜ヒ犬ニ手ヲ噛マル、如キハ目下有リ勝チノ事ナリ嗚呼本書ノ世ニ出ツル誠ニ已ムヲ得サル次第ト云フヘシ本書ハ著者カ浩博ノ學理ト絶倫ノ才想ト處世ノ實驗ヲ以テ人間ノ外形ニ現ハル、顔色容貌一擧一動ハ勿論進進云爲呼吸ノ遲速等ニ依リ其性質ヲ知了シ且ツ其心中ニ懷抱セル正邪淑慝等ヲ悉皆破看スル秘傳ヲ懇切詳解シタル者ナレハ士農商工ノ別ナク今ノ世界ニ處シ安身立命ノ地ヲ

保タントスル者ハ必ス一讀スヘキ緊要書ナリ

卷中目錄

第一章言行ヲ重クシ内心ニ僞計ヲ抱ク狡猾者ノ心中ヲ看破ル秘傳●第二章人ノ癖ニ金ヲ借ラントテ來リシ心中ヲ看破ル秘傳●第三章我姉妹若シクハ女ナトニ想ヲ懸テ張ニ來ル人ノ心中ヲ看破ル秘傳●第四章女郎買等ニ誘出サントスル人ノ心中ハ實面ナリト看破ル秘傳●第五章此人ノ心中ハ實面ナリト看破ル秘傳●第六章傭人ノ正邪ヲ看破ル秘傳●第七章傭人其主人ノ怒氣アル時ヲ見分ル秘傳●第八章身代富ム時ニ我庇蔭ヲ蒙リ身ノ利益ヲ圖ラントテ集來ル卑屈者ノ心中ヲ看破ル秘傳●第九章我ニ惚レタル婦女ノ心ヲ知ル秘傳●第十章妻若シクハ外妾等ノ觀劇又ハ子ダリセントスル心中ヲ看破ル秘傳●第十一章父母ノ心中ノ喜憂ヲ知ル秘傳●第十二章沈默ナル人ノ心中如何ヲ看分ル秘傳●第十三章爭論等ヲ好ム人ノ思慮如何ヲ看破ル秘傳●第十四章少年子弟ノ遊蕩ニ傾ントスル徵候ヲ知ル秘傳●第十五章一面識ノ人突然訪來リシ心中ヲ看破ル秘傳●第十六章人ト事ヲ共ニスルニ當リ其人ノ遂ニ目的ヲ達スヘキ偉器ナルヤ否ヤヲ看破ル秘傳●第十七章對話人ノ語氣ニ就キテ其心中ヲ見破ル秘傳●第十八章人ノ心中ヲ見破ラントヨリハ先已ノ心中ヲ見破ラレサルヤウ要心セヨ●本書ハ秘傳書ナレハ弊店一手ニ賣捌キ別ニ取次キ賣捌所ヲ設ケス

版權所有
增補訂正
第二版

●花柳粹史編著

洋裝　美本全壹冊

本書の奇々、妙々一讀人をして魂を有頂天外に飛ばしむる至極愉快の好冊子なるは下店の慾張口上を待たざるも數十部の製本立ち所に賣切れ候のみならず東京と大坂と都合四五人の○○扱かん太刀の功名にて類製飜刻の雜本までこしらへ無茶苦茶に魔薬散らすのでも能く知れた噺しでムりまして此書の價直もなくなり著者の主旨も違ふ譯に相成り何とも遺憾に候間そこで今度の再版からは○字句の誤謬を正たし○許多の面白き珍説、奇談をも加へ○紙質を精撰し○仕立を良美にし○全く前日の舊痕を殘さず更らに面目を一新仕り候且つサウ〳〵僞版飜刻をやられては叶はぬ故内務省に出願して版權の登錄をも濟ませ完全無缺誠に丹次郎的の錦囊、音羽屋派の三略とも崇むへき寶卷と相成り候に付ては爾後御求めの諸君は第二版增補訂正の分と謂ふて御買ひ入れ被下度候直段の義は大分高價にせねは引合ひに成らず候へとも先つ〳〵當分(十二月末迄)名譽回復の爲從前の通り特別安價**金廿五錢**と府外は別に郵便税八錢御添へ御廻便切手代用は一割增の事　金被下候はゝ早速送本可仕候尤も郵

(書中目錄)

男女交合の心得

男女殖生器の事○婦人の外部生殖器の異狀○女子生殖器の發育○月經の事○婦人の内部生殖器の事○婦人体格説○月經の初現期○月經の終止期○月經の色事の總論○色事は事を爲は人類の一大義務○色事を爲に時と處と配偶人の注意を要する事○色事の行ひ方○戀を仕遂る方法○情死の起る理由○夫婦の交接○色事を爲す順序○我思ふ人に嫌はれぬ法○相手の我に應するや否やを知る秘傳○色事を仕遂るに妨ある事

快樂の秘訣

色事の總論○色事は万物生殖の根本○色

梅毒と防ぐの妙

法色事に志す人平常の心得方を自在に得る法等

懷妊避妊の妙術懷妊の理○不妊の理○懷妊自在法不妊自在法○男兒女兒等

其外**疳瘡治療法**●短小の陰莖を長大ふらむる法●神速に陰精を強むる法●陰莖の包皮不開を治する法●婦人の多淫ふるを治する法●婦人の容貌を視て其可孕女石女たるを判知する法●妊兒の男女を判知する法●少女と成女とを鑒別する法●淋病治療の奇方等へ此度增補せし者なり

●西洋綴中小本全一冊
●紙數百ページ餘
●定價金五十錢

花柳粹史 男女必讀 **思ひのかけはし** 附和洋化粧法秘傳

編著

●今回出版披露の爲三千部限案外の大安賣受候

金六錢にて御求めに應ず滿員の上は定價通申受候事●郵便稅四錢●郵便切手代用は一割增にて申

(書中目錄)**艶書**の雛形○年の始に送くる文○同じく返事○寒氣見舞の文○花見誘ひの文○同じく返事○暑中見舞の文○同じく返事○月見に人を招く文○菊の花を送る文○歳暮祝儀の文○同じく返事○婚禮祝儀の文○同じく返事○安産を祝ふ文○見初めたる女に送る文○同じく返事○逢ふて後女より送る文○同じく返事○後家へ送る恨みの文○同じく返事○待せて來ぬを恨むの文○女郎に送る眞の文○逢ふて後遠ざけられたる女の許より送る文○同じく返事○嫌かる女を口説く文○同じく返事○狂歌、狂句、狂詩、端唄、都々一、文句入、雜錄長崎歌等百餘種

和洋化粧法秘傳髮を結ふ心得**顏の恰好により髮を結ひ樣の事**丸顏、短顏、長顏、長額、長首筋、短首等にウツル秘法**白粉をする心得**丸顏、短顏、瓜ざね顏頬張、長額、其他種々眉の作り樣白粉をする秘法○湯化粧の仕樣○湯を遣ふ心得○目の大なるを小さく見する法○口の廣きを狹く見する法○唇の厚きを薄く見する法○丸顏を長く見する法○外わにを內わにする法○手足を白く光澤を出す秘法○湯を遣ふ時身に汗出るを止る法

陸軍々醫正正五位勳三等緒方惟準君題字●諸名家賛辭及跋詞
大阪府高橋病院副院長松尾耕三君題詞●小田垣但海君編輯

版權所有

第三版

内外名醫 萬法秘傳 人間寶庫

舶來洋紙金文字入洋裝良製
全一冊一万部限り特別實價 **金一圓**にて賣渡切手代用は一割増府外は遠近に拘はらす郵送費十三錢

本書は通俗文平假名附にて万病療治の方法は勿論製藥の分量、調合、及使用の手加減まで明細に記載せ丶四民必携天下無二の實典に有之本年中春始て發行致候に未た十ケ月を經ざる内初版二版何れも數千部宛悉皆賣盡すの榮を得て本書の卓効益世間に著丶く相成り候然るに其の賣高非常に夥丶きを以て射利の奸商等之れを奇貨とし本書まがいの名を附丶或は其代價を引き下げ種々の手段を巧みなる廣告を以て無効の雜書を賣捌く者往々有之由世上の君子幸ひに御注意相成度候

（目錄概略）

總體之部 二方●なまずを治す法、一方●あざを直す法、一方●汗の出つるを止る法○疥癬の治法、三方●がんがさを直す法、二方●たむしを直す法●毛髮を生す法、四方●毛髮を抜き頂る藥の製法●いぼを去る法、三方●ほくろを去る法●上之部 縮み髮を直す法、三方●髮を縮ます妙法、二方●白髮の生ずるを防く法●白髮を抜き黑毛を生す法●白毛を染る法●髮を黑く丶光澤を出す法、二方●髮のふけを去る法●頭痛卽治法●小兒頭痛卽治法●眼病の治法●近視眼を治療する法●とりめを直す法●終身眼病を患へぬ簡便なる豫防法●涙の多く出るを治す法●耳の遠き者を良く聞へ丶むる器械の製法●耳の霜やけを治す法●耳の鳴るを止める法●耳だれの膿出るを治す法●鼻の痛みを治す法●鼻の赤き●鼻血を止める法●耳だれの膿出るを治す法●口中の臭氣を除く法●口中の臭氣を除き齒牙を白くする法●齒の痛みを治する法、六方●虫くい齒を直す法、二方●口中の熱を去る法●發聲を高く丶且つ爽かにする法●かれ聲を直す法●談話する時其聲を清爽ならしむる法●咽頭の腫れを治する法●顏に黑く斑あるを癒す法●顏のにきびを去る法、二方●そばかすを去る法●咽喉の痛みを治する法●誤て毒物を飲下丶たる時の卽救法●過食丶たる時の救助法●胃弱の治法●風邪を卽治する簡便法●さなだむしを治するの妙法●胸の痛みを治す法、二方●咽喉に食物の詰りたるを除く法●寒氣に手足の丶びれ丶を直す法●手足の霜やけを治す法、二方●痢病を卽治する法、四方●せ陰門のたゞれを治す法●月經の不順を治す法、三方●便秘を治する法●子宮病を治す法●睾玉炎を卽治する法●脚氣病を卽治する法●痔疾を卽治する法、二方●疝癪を治す法●ひゞあかぎれを治する法●陰虱を除去する妙法、二方●陰虱を除去する法●腋臭を治する法、二方●そばかすを去る法●胆頭の卽治法●遺尿の卽治法●群集に傳染病を豫防する法●凍死人救助法●溺死人救助法●首縊人を救助する法●火壓倒され或は高所より落ちたるを救助する法●金瘡を受たる人を救助する法●烟に咽せ死せんとする人を救助する法●泥醉人を救ふ法●大酒して醉はざる法●酒の醉を醒す法、二傷丶たる人を救ふ法、二方●遠行する時の心得●夏日旅行するときの心得●寒中方●船に醉ふを防ぐ法、二方●遠行する時の心得●蚤を避くる法●虱を避くる法●河を渡りて凍へぬ法●寢すに居ても氣が衰へぬ法●妊婦の精力を增す飲料の製法●乳母の撰定法六譯●分娩胎内の兒の男女を知る法

時期を知る法●諸の毒虫に噛まれ或は刺れたる時の卽治法、三方㊀腫物のうまざるを熟す法●菌類に毒の有無を知る法等以上

版權免許
半痴半黙生題字
松の屋みさを君著
出版落成

戀愛哲理

色界之燈

洋裝最良美本一冊正價三十錢出版披露の爲め三千部限特別金**廿五錢**にて御求に應ず府外郵便稅六錢切手代用は一割增

此の書は風流の意匠と才筆の艶麗とを以て其名の高き松の屋みさを先生が男女戀愛の情理を實際的の眞說に加へ詳論極悉したる者にて色海更に情波を籠め人をして快樂の佳境に彷徨せしむ蓋し其奇極妙味を弄ぶは讀者の專有にあり

(書中目次)第壹章色情總論●第二章色情發育及順序●第三章八類の義務●第四章戀情の起因第一皮想より起るの戀●第二金力より起るの戀●第三才藝より起るの戀●第四閨情より起るの戀●第五一時の感激より起るの戀●第六親切より起るの戀●第七意氣相投ずるより起るの戀●第五章戀情の障碍第一男女間の不權衡●第二女の男に優れること●第三疑心深きこと●第四自惚の深きこと●第五女の浮氣なること●第六思慮なきの戀●第七夫妻間の同體異心れること●第六章一夫多妻論●第七章娼妓と藝妓●第八章情死論●第九章婚姻論●第十章交合論●第十一章架空的の戀●第十二章結論

亭々山人藤原龍孫吉士題字○石原成軒編輯

第二實地經驗 技術全集

西洋綴全一冊○定價金五拾錢○再版落成祝に付一万部限特別正價**金廿錢**○府外郵便稅四錢○切手代用一割增

版

右は編者が多年の眞焦心苦慮の上學理と經驗とに依り其成功確著なるもの、みを記載したる者にて方今世間に行はるゝ名ありて實なきの類にあらず其卷中の概略は衣食器具製造、妙術の六綱より成り立ち其目錄を分てば二百九種の多きあり何れも人生日用尤も必需の要件のみなるを以て初版數千部恐皆賣切れと相成り今般第二版を印行致し廣く四方の御求めに應し候

○序言谷將軍ノ歌依田百川翁○成軒學人編輯

陸軍中將 隈山公傳

精密肖像入洋裝全一冊●正價二十錢 郵送費四錢郵券代用ヲ諾ス

出版披露ノ御祝儀トシテ紙費實價 **金十錢**

明治ノ元勳國家ノ干城谷隈山公ハ幾ニ奥羽ニ九州ニ千軍万馬ノ間ニ馳騁シテ命ヲ鋒鏑ニ委シ身ヲ風霜ニ曝シテ天下ノ大難ニ當ラル今ヤ議合ス決然高踏民生ト休戚ヲ同フセラレントセリ嗚呼公ガ昔日身命ヲ輕セシモ今日榮職ヲ再退スルモ國家ヲ思ヒ人民ヲ愛スルノ裏情ナラサルハナシ宜ク人民タル者ハ公ノ詳傳ヲ誦シテ益敬慕ノ念ヲ起スヘキナリ況ヤ其少年ノ奇行壯年ノ勇士男兒ノ心膽ヲ感發スル者藏メテ此ノ冊子ノ裡ニアリ殊ニ演説筆記ノ如キハ語々悲壯句々慷慨國ヲ憂ヒ民ヲ懷フノ情紙面ニ淋漓タリ蓋シ此卷ヲ讀メハ公カ内閣ニ提出シテ挂冠ノ因トナリシ**意見書**ノ主旨モ果シテ其何レノ邊ニ存スルヤヲ知リ得ヘカランカ

出版發賣本舗

大阪東區谷町一丁目七十五番邸

大和屋 謹告

特20
848

乱世の英雄

国立国会図書館

005160-000-5

特20-848

乱世の英雄

大西　敬太郎／著

M22

ACE-1996